

●外国人児童生徒教育フォーラムに参加して（感想）

原千代子（川崎市ふれあい館 館長）

今回の外国人児童生徒教育フォーラムへの参加は、日頃の日常実践を振り返り、課題を検証する良い機会でした。とりわけ、馬場先生がまとめてくださった「日本のSSWにこれから求められること」は、示唆に富むものでした。

その頃から最近まで、相変わらず、地域の取り組みで、さまざまな相談を受けています。その中で感じていることは、やはり「スクールソーシャルワーカー」が活かされるためには、いろいろな機関の連携・協働が社会的に確立し、制度化されることが基本だと思います。実際の現場においては、長年の「縦割り行政の壁」はとても厚く、こどもや保護者の実態を中心にすえた「場づくり」に時間と労力がかかることも多く見られます。そういった状況では、「スクールソーシャルワーカー」の本来的な役割は発揮されにくいのではないのでしょうか。

現在、日本社会でもようやく『移民』2世の社会参加が増加し、バイリンガル人材養成の必要性にスポットが当たるようになってきました。外国につながる人びと、家族が受けている情報弱者としての不利益を解消する制度は、以前よりは整ってきた感があります。しかし、DV等で苦しんでいる女性やこどもの相談で思うのは、当事者が声を上げることは壁が高く、また日本語が日常会話程度できても、気持ちを表現することにはさらに壁が高い状況です。そういった意味で、日本社会のシステムを熟知するバイリンガル相談員の養成は、行政機関こそが率先して取り組むべき課題だと考えます。今回のようなフォーラムを通じて、各団体、自治体、研究者等の実践知が検証され、今後、輪がより広がっていくことを願っています。